

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様には、日々恙なくお過ごしのこととご拝察申し上げます。

先日の台風8号が久しぶりの大雨と、秋の冷気をほんの少しだけ運んでくれましたが、今年の夏は一際暑く、またコロナ騒動の中で恒例のお盆もソーシャルディスタンスとやらで、ご先祖様とも何だか縁遠くなったような気がします。

そのご先祖様達が命を懸けて戦い抜いた「大東亜戦争」末期、サイパンや硫黄島、そして沖縄が玉砕し、B-29 による本土空襲で大都市は焦土と化す中、広島と長崎に原爆を落とされた上、「日ソ不可侵条約」を破ったソ連が満州に傾れ込み「終戦」を迎えました。

毎年8月15日前後にはこのような特集番組が流されて気が滅入ってしまいますが、今年も宮崎県護国神社で終戦記念報告祭を開催したところ、河野県知事を始め大勢のご来賓にご参加を賜り、泉下のご英霊達から「コロナ等に負けるな」との叱咤激励が聞こえたような気がします。

ところで歴史に「if」はないそうですが、もし日本がポツダム宣言を受諾せずに継戦派の意見が主流だったらとの、正に「if」の歴史考察秘話を見掛けましたので、「ニシタチ」にも行けずひたすら「ステイホーム」の真っ只中ではありますが、皆様是非ともご一読下さい。(笑)

## ・日本が本土決戦をしていたら何が起きたか

---

(静岡県立大学グローバル地域センター特任助教・西恭之)

本稿では、日本軍と米軍の作戦計画のあらましを解説した上で、その**現実性**について、対極的な二つの見方を紹介したい。日本は戦力を急速に失いつつあったので 1945 年の**降伏は不可避**だったという、『**米国戦略爆撃調査**』の見方と、**消耗戦**となり、日本が壊滅するだけでなく、**米軍**もかつてなく**多数が死傷**する事になったという、軍事史家 D・M・ジャングレコ氏の見方である。

## ◆決号作戦

---

日本側は 1945 年 1 月、本土決戦の本格的な準備を始めた。米軍はフィリピン・ルソン島に上陸

しており、沖縄へ進攻するのは時間の問題となっていた。大本営は、米軍が小笠原諸島や沖縄など「前縁地帯」へ進攻した場合、**持久戦**によって**出血**を強いながら本土決戦を準備すること、**本土決戦**でも出血作戦によって、日本が**朝鮮・台湾・満州**を保持する条件での**停戦**を米国に強要する戦略を採用した。その**陸軍作戦**を**決号作戦**という。

陸軍は、**主戦場**になると予測した**関東と九州**の作戦を準備・指揮する、**第 1 総軍と第 2 総軍**を 1945 年 4 月に設置した。第 1 総軍(東京)は鈴鹿山脈から東の本州、第 2 総軍(広島)は西日本を担当した。また、**航空総軍**を設置し、陸軍航空部隊の指揮と教育訓練を一元化した。**北海道・南樺太・千島列島**は**第 5 方面軍**、朝鮮は**第 17 方面軍**、台湾・沖縄は**第 10 方面軍**が引き続き担当した。

**日本本土の陸軍兵力**は、1944 年夏には 46 万人に満たなかったが、**満州**からの転用や、「**根こそぎ動員**」と呼ばれる 45 年 2 月、4 月、5 月の召集と部隊新設によって、**200 万人**に達した。

日本陸軍は、米軍が 1945 年 10 月以後に宮崎市、志布志湾、薩摩半島西岸に上陸すると、**正確に予測**していた。九州の陸軍兵力(第 16 方面軍)は、45 年 4 月末の 4 個師団強から、8 月末までに 14 個師団、独立戦車旅団 3 個、独立混成旅団 6 個など **90 万人**に増えた。その多くは、薩摩半島を担当する**第 40 軍**と宮崎・志布志湾方面を担当する**第 57 軍**に配備された。

新設された「**沿岸配備師団**」は、海岸の横穴陣地やトーチカとその背後の丘陵から、米軍の上陸部隊を制圧射撃し、そこへ内陸から「**機動打撃師団**」が前進して殲滅するという作戦構想だった。いずれも兵器が不足していたが、まず**現地の地形に習熟し、その間に兵器を生産**するという理由で配備された。

日本軍は米軍の九州上陸部隊の**半数を、特攻機・特攻艇で撃沈**することを計画した。旧式機は特攻機に、飛行訓練部隊は特攻隊にするという方針は、**1 万 440 機**が対象となった。新型機 2300 機は対象外とされた。

戦艦大和喪失後、**日本海軍**は大型艦の航行を停止したので、**水上・水中でも特攻**が主な攻撃手段となった。7 月末には、特殊潜航艇・**蛟龍** 73 隻、同・**海龍** 252 隻、人間魚雷・**回天** 119 隻、特攻艇・**震洋** 2850 隻(陸軍の 700 隻を含む)が配備され、生産が続いていた。**特殊潜航艇**は生

還不可能ではないが、**魚雷不足**のため、**海龍**のほうは**爆薬**を積んで特攻することが前提となっており、本土の民間の15-60歳の男性と17-40歳の女性は、1945年6月23日の義勇兵役法によって、**国民義勇戦闘隊**という民兵に組織され、**武器**は**隊員各自**が竹槍、刃物、弓矢、猟銃等を用意した。

本土決戦を想定して皇居、大本営、政府中枢機能を移転するための**松代大本営**(現・長野市松代町西条)は、**1944年11月**から**建設**され、賃金労働者(日本人・朝鮮人)と勤労働員者(日本人)が作業に従事した。**進捗率75パーセント**の段階で45年8月15日を迎え、工事は中止された。

## ◆ダウンフォール作戦

---

米軍など連合軍の日本本土上陸作戦計画・ダウンフォール作戦は、1945年11月1日(Xデー)に南九州に上陸する**オリンピック**作戦と、46年3月1日(Yデー)に**関東地方**に上陸する**コロネット**作戦に分かれていた。**マッカーサー**陸軍元帥が地上部隊と戦術空軍を指揮し、必要な場合は米太平洋艦隊(ニミッツ司令長官)も指揮することになった。

**オリンピック**作戦は、コロネット作戦に必要な**航空基地**や**泊地**を確保する目的で、現在の地名でいう薩摩川内市、えびの市、都農町の北側の**進出線**に、**上陸後3-4か月**で達する作戦である。米第6軍の約**14個師団**、**25万人のうち**、Xデーには宮崎市に第1軍団、志布志湾に第11軍団、薩摩半島(串木野)に海兵隊の第5水陸両用軍団の合計**9個師団**が、戦艦13隻の艦砲射撃の中を上陸する。英連邦諸国の空母や爆撃機も加わる。

**原爆**も**化学兵器**も、日本軍に対して使用される可能性があった。ただし、**農作物**に対する**生物化学兵器**の使用は、準備が中止された。使用した場合、占領地に残ると推定される**住民220万人の食料**を全部、米国の供給する責任が生じるからだ。

**コロネット**作戦はさらに大規模で、目的は、**関東平野**を占領して日本軍を降伏させることである。**九十九里浜**南部に第1軍、神奈川県**平塚市**に第8軍が上陸し、東西から**東京**を**包囲**して攻め落とす。Yデーから10日以内に14個師団が上陸し、第1軍は**鹿島灘**沿岸、第8軍は埼玉・群馬・栃木・茨城県境付近の**利根川中流域**にも進攻する。その後、第10軍や英連邦軍団も上陸

する。

## ◆降伏は不可避だったという米国戦略爆撃調査

このように計画されていた日本側の本土決戦、連合国側の日本本土上陸作戦だが、終戦直後に米陸軍省が経済学者らに委託した『米国戦略爆撃調査』によると、日本は戦力を急速に失っていたので、1945 年内の降伏は不可避だったという。

「全ての事実を詳しく調査し、それに関与した存命中の日本の指導者たちの証言を聞き取った結果、仮に原爆が投下されず、ロシア(ソ連)が参戦せず、上陸進攻が計画も予想もされなかった場合も、日本は確実に 1945 年 12 月 31 日より前に降伏し、ほぼ確実に 1945 年 11 月 1 日より前に降伏したと結論する」

1945 年 8 月まで通商破壊と空襲を受けても、日本は降伏していなかったのに、なぜそういえるのか。その切り札は、青函連絡船、関門トンネル、鉄道橋 19 本などを空襲によって遮断し、日本を 5 地域に分断することだという。そうすれば、本州では石炭が不足して蒸気機関車が止まるので、「日本は孤立した町や村の一群となり、工業生産も、食料を農業地帯から都市へ送ることも、軍隊と兵器を大規模・迅速に移動することもできなくなったに違いない」という。しかし、米軍は B-29 爆撃機による機雷投下も、青函連絡船や鉄道施設に対する空襲も、1945 年 3 月ないし 7 月まで始めなかった。

## ◆Hell to Pay(とてつもない報い)になったか

---

対照的に、D・M・ジャングレコ氏は、著書『Hell to Pay(とてつもない報い)——ダウンフォール作戦と日本進攻、1945-1947 年』(2009 年初版、17 年第 2 版)で、日本には米軍に消耗戦を強いる意思と能力があったという多数の根拠を挙げている。

例えば、マッカーサーの情報参謀のウィロビー少将は、九州の日本陸軍が 13-14 個師団相当に達したとわかった 1945 年 7 月の段階で、上記の進出線に達するまでの米軍の戦死傷者数を 21-28 万人と計算したうえで、控えめに 20 万人と見積もっている。ジャングレコ氏によると、オリン

ピック作戦の戦死傷者が 20 万人の場合、**戦闘以外の事故や病気を含むと、米軍の死傷者は 50 万人に達したはずだ**という(戦闘に復帰できる者 5 万人を含む)。

『米国戦略爆撃調査』や米陸軍航空軍の公刊戦史は、**日本の食料事情が悪化したことも戦果に挙げている**。日本人のカロリー摂取量は、対米開戦前の 1 日 1 人平均 2000 カロリーから、1945 年夏には 1680 カロリーに減り、脂肪、ビタミン、ミネラルの摂取量はさらに減った。しかし、ジャングレコ氏もいうように、一億玉砕を叫ぶ**軍部にとって、それは降伏すべき理由にはならなかった**。

**戦争が続いていれば、日本の本土決戦派にとって、1945 年 10 月のルーズ台風**(阿久根台風)と 46 年 3 月の**バーバラ台風**は、オリンピック作戦とコロネット作戦を遅らせる「**神風**」となっていたとも、ジャングレコ氏は指摘している。

**ソ連軍が北海道へ上陸進攻した可能性については、もし 1945 年 8 月に実行していれば失敗**していると、ジャングレコ氏は分析している。揚陸能力が不足し、ソ連軍が南樺太などへ進攻したため日本軍が警戒しており、北海道上空の航空優勢を確保できる見込みもなかったからだという。

ジャングレコ氏の著書『Hell to Pay』は、決号作戦とダウンフォール作戦を、これまでになく詳しく分析している。しかし、**分析から欠落している点もある**。日本が降伏することなく、**南九州や関東地方の防衛準備を続けた場合、連合軍は、『米国戦略爆撃調査』が提言したような方法で妨害したはずだが、**そうした妨害が実行された場合の効果を計算に入れていないことだ。この要素を加えると、消耗戦となって南九州だけで米軍 50 万人が死傷するとは結論できない。以上

私が子供の頃、「ハワイ攻撃の際にもう一波攻撃機を繰り出して、オアフ島の石油備蓄基地を叩いておけば、米太平洋艦隊は半年以上作戦行動は出来なかった」とか、「ミッドウェー海戦で我が索敵機が敵空母艦隊を発見した際も、魚雷等に換装せず爆弾攻撃を仕掛けていたら主力空母4隻を失う等の一方的被害は無かった」とか、「ガダルカナル攻防戦でも兵力の逐次投入を避け、相応の人員と装備を持たせた上で一戦交えれば、2万の米海兵隊を太平洋に追い詰めて、我が軍が折角作った飛行場は確保できた」とか、色々聞かされて切齒扼腕したものです。

今から10年近く前に、本土決戦用に築城した長野県の松代大本営壕も見学しましたが、日本国土で一番横幅の広い地形でも 200 マイルしかなく、僅か 320km では戦闘機でも 2~3 往復出来

そんな距離であり、果たしてこの場所で国体を守れたのだろうかと率直にそう感じました。

しかし 75 年前の夏、確かに日本では正に国民が一つになって全世界を相手に戦っていたのかと思えば、英霊達が我々に「コロナ等に負けるな」との声も宜なるかなと思う次第です。

立秋も過ぎそろそろ涼しくなるはずですが、「残暑」と「コロナウィルス」には呉々もご留意の上、何卒ご自愛専一にお過ごし下さい。

令和2年9月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小 倉 和 彦